

『JOY:奇跡が生まれたとき』

監督：ベン・テイラー

脚本：ジャック・ソーン

出演：トーマシン・マッケンジー、
ジェームズ・ノートン、ビル・ナイ

2024年/イギリス/115分



予告

Netflix 映画
独占配信

社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる
きつと もっと 知りたくなる

1978年7月25日、世界で初めて体外受精による子どもが誕生した。以来、世界で1千2百万人以上が体外受精により誕生している。今では生殖医療の選択肢のひとつとして広く認知されている体外受精だが、この技術が生まれるまでには10年の歳月と282人の女性たちの協力、そして人生を懸けた3人の人物がいた。のちに体外受精の技術でノーベル賞を受賞した生物学者のエドワーズ、産科医で腹腔鏡の第一人者であるパトリック、そして看護師のジーンだ。

体外受精が成功するまでに長い年月がかかったのは、技術的な難しさだけが要因ではない。世論の風当たりが非常に厳しかったのだ。「試験管ベイビー」という表現はよく知られるところだろうと思うが、「フランケンシュタインのような研究」「罪人」「恥を知れ」などと非難の声があふれ、嫌がらせの電話や郵送物も日常茶飯事だった。ジーンに至っては、母親が敬虔なクリスチャンだったため、「神様のまねごとみたいなことはだめ」と猛反対され、勘当同然で突き放された。実はジーン自身も子どもを授かるのが難しい身体だったのだが……。

幾重もの障壁にぶつかり犠牲を払ってもなお彼らが研究を続けたのは、技術を求める数多くの女性たちの声を受け取っていたからだろう。どうしても子どもがほしい、これが唯一の希望、助けて……と。だがそうした声は当時過小評価されていた。研究費を得るために評議会へ働きかけたところ、「(不妊は)非常に限られた人が抱えている問題

「地獄の試験管」と言われた 体外受精に人生をかけた3人

アーヤ藍

で、(体外受精の技術で)得をするのはひと握りの女性たちでは？」と言われてしまう。

一方で女性たちの声が、純粋に子どもがほしいという思いだけによるものではないことも本作は示唆する。当時は今よりもはるかに、結婚して子どもを産むのが「自然」で「当たり前」のことと考えられていた。夫や親族から直接的、間接的なプレッシャーを受け続けてきた女性たちは、子どもができない自分に欠陥があるように感じてしまったり、結婚生活や人生そのものが「失敗した」と感じてしまったりする。

女性たちが置かれているそうした境遇も理解しているからこそ、3人は自分たちの研究を「正義」として振りかざしはしない。「子どもをもつことがすべてではないものの、選択肢を与えるためだ」と話すシーンや、体外受精でも子どもを授けられない女性たちにむしろ新たな痛みをもたらしてしまうと葛藤するシーンが印象的だ。本作の脚本を手がけたジャックは妻との間に7回の体外受精で子どもを授かった。その経験ゆえ、本作で描かれる女性たちの悩みや葛藤は現代にも重なって見える。

リプロダクティブ・ヘルス・ライツが脅かされ始めたアメリカの実情を見るにつけ、約50年前に、人生を賭し、未来へ希望のバトンをつないでくれた人たちのことを、今しっかりと想いたい。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

